

執筆要項

— 改訂 2026年 7 月 —

- (1) 原稿は、数式・図・表も含め、パーソナルコンピュータを用い、可能な限り平易なフォントを用いて作成すること。
- (2) 原稿の分量は、刷り上がり時において、原著論文については24頁以内、総合報告については32頁以内、ソフトウェア記事については24頁以内を原則とする。
- (3) 原稿作成にあたり、日本語 $\text{p\LaTeX}$ のスタイルファイルおよび見本が学会ホームページ上で掲載されているので、原則としてこれに拠ること。日本語 $\text{p\LaTeX}$ 以外で原稿を作成する場合は、上記の見本と同様な体裁とすること。
- (4) 提出ファイル中には、次の事項を必ず含めること。

和文題名、著者名・所属・住所・電子メールアドレス、400字以内の和文要旨、英文タイトル、英語表現による著者名・所属・住所

また、原著論文・総合報告にあつては、英文要旨(200語以内)と、5個以内の英語のキーワード(Key words)もつけること。ただし、キーワードは英文タイトルと重複しないこと。

- (5) 節、項の番号のつけ方は、第1節にあたるものは1.とし、第1節、第1項にあたるものは1.1とすること。
- (6) 数式はスペースの節約と明快さに心がけること。また、重要な式には(3.1)などのように、節を単位とした数式番号をつけること。
- (7) 参考文献は本文中で言及されたもののみを以下のように書き、欧文文献に関し邦訳のある場合には邦訳も含めること。同一著者による同年発行論文にはa, b, c, ... と順序をつけること。なお記載の順序は、和文文献と欧文文献を合わせて著者名のアルファベット順に記載すること。

記載書式 著者名(複数の場合、和文は「・」で、欧文は“,”と“&”でつなぐ)(年号)。題名(書名の場合は斜体。論文誌・予稿集等からの引用は立体)。付随情報(書籍の場合は出版社名などを立体で記載。論文誌等引用の場合は引用元を斜体、それ以外の情報を立体で記載。Volumeは太字で記載のこと)。※欧文文献で訳書等がある場合は□で併記し、□内の書式も本記載に準じること。

例1: Agresti, A. & Yang, M. C. (1987). An empirical investigation of some effects of sparseness in contingency table. *Computational Statistics & Data Analysis*, **5**, 9–21.

例2: Gnanadesikan, R. (1977). *Methods for Statistical Data Analysis of Multivariate Observations*. John Wiley & Sons. [丘本 正・磯貝恭史 訳 (1979). 統計的多変量データ解析. 日科技連]

例3: 脇本和昌・後藤昌司・松原義弘 (1979). 多変量グラフ解析法. 朝倉書店.

- (8) 本文中での参考文献の引用は、形態に応じ、Gnanadesikan (1977), 脇本 他 (1979), (Goodman, 1979a) または (Gnanadesikan, 1977; Goodman, 1979b) 等とすること。

※著者が2名の場合、和文は「・」で、欧文は“&”で両名を併記、3名以上の場合、和文は「他」、欧文は“et al.”を用いること。